

介護施設で「セラピードッグ」

可愛いセラピードッグに笑顔を見せる女性

＝NPO法人介護高齢者ドッグセラピー普及協会提供



「セラピードッグ」と呼ばれる犬がいる。認知症を抱えた人や身体能力が衰えた人が、犬と触れ合うことで症状が回復することがあるのだという。「動物介在療法」と呼ばれる、この療法の研究などに取り組むNPO法人「介護高齢者ドッグセラピー普及協会」が療法を実践している北谷立田の介護施設「高松アクトティブホーム」を訪ね、どんな犬たちなのか会ってきた。

【平川義之】



人目を合わせながら、歩行を学ぶ訓練を種々のセラピードッグ

認知症に効果期待

見聞録 @

同施設で飼われるセラピードッグは8頭。積み重ねていく。名前を呼ぶ（候補引退意）で、ふと呼びかけた方をじっとうしろ目で活躍するのと同じように、歩き始めは頭、種類や大きさをめぐる視線を合わせたまま、ゆっくり歩動を分、癒やされた気持ちでそれ13年の時間を合わせる。相手が車椅子になる。それが、病氣

子の人でも対応が可能だ。「言葉を使わずに自分、アイコンタクトがとて大切」と介護療法を手助けしているセラピストの三宅慶子さんは解説する。

動物介在療法、普及目指す

などにも好影響をもたらすのだそうだ。施設でも、認知症の人が家族も知らない昔のことを犬に話しかけたり、手足が不自由な人が犬をなでるなどしようとするうちに段々と動かせるようになるなど、専門家も驚くような例が相次いでいるという。



施設で活躍するセラピードッグたち。世話をするセラピストもいずれも北谷立田の高松アクトティブホームで

進地の米国で初めてセラピードッグに出会った。すぐに米国から2頭を迎え入れ、自分の医療法人が運営する施設で介護療法を始めた。犬が「喜びの犬大丈夫？」と声をかけてる姿を目にした。以前はハビリをよく休んでいた女性だったが、ジャスティンとの出会いを境に毎日、来るようになった。「犬を守ってあげたい」という使命感や、何かしてあげたいという役割感などが芽生えたことで気が生まれたのではないかと生長さんは振り返る。

現在、NPOでは、特に認知症に対する効果に関する研究に力を入れており、その成果を定期的に公表している。生長さんは「介護療法が認知症にある程度有効であることを国に示し、介護保険の対象になるようにするのが目標。介在療法への認知度を高め、全国的な普及を目指したい」と話している。



犬たちは車椅子を使う人に合わせた訓練も受けている